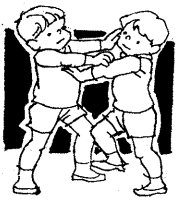
幼児のはじめての集団経験

―幼児の立場から―

田中玲子



毎年四月が近づくと、わたくしたちは期待と責任とで胸がいっぱいにふくらみますが、それにもまして始めての集団生活をする幼児の期待と不安とはどんなに大きいことでしょう。

そこでわたくしどもは四月は、「幼稚園とは楽しいものだ」という集団の中での安定感をもたせることに目標をおいて、保育をすることにしています。そこで幼児たちはどのようにして始めての集団経験をしていったか、入園式からの実践例をもとにして述べていきたいと思います。そして、この実践の中で教師が幼児を理解していく過程を通して、幼児の立場を考えてみたいと思います。なお、ここに記しましたのは、五才児一年保育の記録です。

＜入園式＞

・第一日の安定とはどんなものだろうか

入園式の日、お母さんといっしょに、登園してくる幼児たちは「幼稚園ってどんなところだろう」という期待や、先生とは、わたくしたちにどのようにしてくれるのだろうかという不安など、幼児なりに複雑な感情をそれぞれもっているでしょう。

そこで、わたくしたちは、幼稚園の生活と、家庭での生活とが断層のないように配慮するとともに幼児の期待にこたえるような、幼稚園でなければできない楽しい経験をどのようにさせるかということ、そのためには、ひとりひとりの幼児が満足して幼稚園から帰れるようにということ、教師や他の幼児の接触においてもできるだけひとりの幼児に重荷のかからないようにすることなどにできるだけ配慮したいと思い、以下のような実践をしてみま

した。

(1)環境の整備

うわァ遊ぶものがいっぱい。遊んでみようかなという気持ちがおこるよう準備したいと思い、戸外では二輪車・箱車、砂場遊びの用具・シャベル・フルイ・バケツ・容器などがすぐ使えるようにだしました。室内も部屋の感じが堅苦しくないよう、机は片づけて広くし、花をおき、近親感がもてるよう修了していった幼児の作品を展示したり、ディスプレイの中には何か幼児が作りたいとき、すぐ作れるよう、ハサミ・セロテープ・包装紙・ワリバシなどの身近にある材料を入れ、よこに机を二つ並べて使いやすいようにしました。その机の上には金魚をのせて明るい感じにしました。本たてもそばに。部屋のすみには、オルガンのふたをあけ、その横には、タンブリン・鈴・トライアングルなどとりやすいよう一つずつかけ、いつでもならして遊べるようにしておき、一方のすみには、ままごとコーナーを作り、積木・組木・汽車・ブロックキャップなどもすぐ使えるように準備しました。

(2)教師との話合い

幼児は園の入口で自分の属するクラスを知ったあと、クラスの担任のところへ母親といっしょにいきますが、これが幼児と受持ち教師とのはじめての接触ということになります。わたくしは少しでも早く幼児たちと慣れるため、受けつけでひとりひとりの幼児に名札や地域別リボンをつけてやりながら、「おはようございます。お名前は」「〇〇〇〇」「じょうずにいえるのね」「Mちゃん大きいわね」「いい子ね」「きくのお部屋でまっててね」などと感情的・身体的接触を通して話しかけることにしています。

(3)入園式のもち方

母親のいる入園式の日に母親と離れた場をもつことは、明日からの幼児たちの不安な気持ちを少しでもやわらげると思い、わたくしの幼稚園では、入園式から保育をはじめることにしています。つまり、入園式は園長のお祝いのことばと簡単な受持ちの紹介だけにし、そのあと、母親は式場へ残って当園の教育方針や幼児教育について、園長の話を聞いてもらい、幼児は母親とわかれて担任教師との人間関係をつくるため、保育をすることにしています。

(4)はじめての保育

保育の時間は、三、四〇分くらいですが、幼児としては、はじめて母親とわかれて、大きな集団で遊ぶという経験をします。母親が幼稚園内にいるということが、幼児にとって心強いことだと思います。わたくしは幼児たちをまず保育室につれていきました。大部分の幼児は何をして遊んだらよいか迷っているようでしたが、保育経験をもった四名の幼児のうちの一人M男が、大きな声で「何しよおーかなァ」といいながら部屋中をながめ歩き、「積木しよおーや」と

積木のところへいって大積木をつみ始めました。「Mちゃんの積木は何ができるかナ」といって近づくと、あとの三人も「ぼくもしよー」とやり始めました。それにつづいてほかの幼児は積木のそばへよって眺めたり、三名ばかり汽車を動かしたり、ままごとコーナーをのぞいて二つの電話をさわってみたり、またB男は、園舎がL字型なので、保育室のガラスごしに母親のいる方をのぞいて「お母さん何しとんのかナ」と母のことが気になるようでした。

ある幼児は絵本をみたり、またボーッと立っていたりしていますがまだ全体的にみて何となく落ちつかないようです。青白い顔の弱々しいT子は保育室の柱にだきついて、目にいっぱい涙をためお母さんのいる会場を眺めていました。何とか元気をだして遊んでくれないかと思って「T子ちゃん、何かして遊ばない」と話しかけたのですが、それが感情を刺激したらしくよけい悲しそうな顔をするので「そこにいる方がいいのね」とさそいかけをやめましたが何となく気がかりです。でもよい方法がないのでよい機会がくるのを待つことにしました。

そこで教師が中心となってクラス全体でする活動をした方が幼児の安定感が増すのではないかと思い、緊張のため用便にいきたい幼児もいるようなので「お便所にいきたい人いますか」と聞くと、「はい」とたくさんの幼児が答えましたので下靴にはきかえお手洗いに行くことにしました。すると泣いている幼児を除いて、全部の幼児が不安定そうにぞろぞろついてきました。このような現象をみていますと、教師と幼児との人間関係がいかに大切であるかということを、ひしひしと感じますし、何とか幼児と早くラポールを確立したいという気持ちになります。しかしあまりあせると、かえって逆効果になりますので、時間というものをうまく費やして幼児の自発的な行動をさそうようにしていきたいと思います。

靴をはきかえたので、園庭へでて、幼児といっしょにブランコ・スベリ台をしました。みんな静かなのり方です。花壇の花を眺めたりして保育室にもどりました。こんなことをしている間に時間がたってしまいましたので、手洗いをし、幼児にいろいろ話しかけてみました。「先生とってもうれしいのよ。だって毎日々々今度〝きく〟ぐみにくる子はどんな子かなァって、胸をドキドキさせて楽しみに待っていたの。そしたらこんなにいい子ばかりでしょう。だからうれしくって仕方がないわ。明日も元気にあそびましょうね。明日元気に幼稚園にこられますか」「はーい」「じゃ先生待ってますよ。明日幼稚園にきたらね、入口のげた箱のところで今日のように上靴にはきかえてちょうだい。そして自分のカバン掛けにカバンをかけて、先生に『お早ようございます』って元気な顔を見せて下さいね。それからまた好きなお遊びをしましょう。おもしろいですよ。ではさようならのあいさつをして、外

にまっているお母さんと一緒に帰りましょうね」この話はどうやら聞けましたがお母さんのことが気になる幼児も相当数おり、「さようなら」というなり元気にとび出していく幼児をみていますと、教師よりも母親というものに対する信頼感の方が強いということに、何となく悲しくなったりしました。

母親と離れられないS子の場合

S子は始めからひとり別行動でした。受け付けからS子はぴったりとお母さんにくっついたままでした。「Sちゃんおはようございます」と話しかけてもニコリともしないで、お母さんの脇の下からくちびるをつきだして、じっとこちらを見ているだけでした。背は高く、ぽっちゃりした色白で、きりっとした目は、しっかりした感じを受けました。ところが式場に入るときでもみんなと並ばずお母さんから離れないので、お母さんが並べようとすると、すごい声で泣きさけびました。それで一人だけお母さんの席で入園式をしました。式のあとも「お友だちといっしょに遊ばない?」とさそいかけても、保育室には入らずとうとう帰りまでお母さんと離れませんでした。帰るときお母さんは心配そうな顔をして、「先生、今日はどうも御迷惑をかけました。家ではおっちゃくいのですけどね、こんなのとは夢にも思いませんでした」と他の幼児との違いにお母さんは少し興奮していわれました。

それで今までのようすを聞いてみるとS子は長女、二つ下の弟と両親、祖母の間で育ち、近くにともだちがいなかったので、入園まで弟と家で遊び、弟とけんかしたり、大声でふざけたりしてとても元気がいいといわれた。そこで今日はお母さんが不安定な気持ちになっても困るので、今まで友だちと遊ばなかったし、急に生活が変わったための行動だと思うから、あまり心配しなくてもいいでしょう。徐々に幼稚園というものをわかってもらいますから、当分お母さんの付き添いをお願いします。これからは家ばかりで遊ばせず、姉弟をつれて公園や山などにさんぽにつれていったりして下さいとたのみました。S子のこのような行動の原因は何かということについて一応家庭での過保護・溺愛・幼稚園生活という急激な変化のための不安ということにしてみました。だから自分で納得するまでお母さんにきてもらい、自分から一人でいようという気持ちがでるまで、待つことにしてみました。T子の方も帰りまでとうとう柱から動きませんでした。

＜二日目＞

・いろいろな幼児の姿

八時前に出勤、ひとりひとりの幼児たちが充分に遊べるように前日と同じように環境をととのえておく。八時二十分頃、M男・

Y子が登園してきました。はじめて自分で登園してきたのだが、何の抵抗もなく上靴にはきかえ、カバンをかけています。「おはようございます。二人できたの？」というと、M男は元気よく、Y子は緊張して小さな声で「おはようございます」といった。「えらかったわね、好きなもので遊んでらっしゃい」というと二人はブロックキャップで遊びはじめる。そこへG男がやってきました。カバン掛けの自分の場所がわからず、その場でもじもじしています。「Gちゃん、おはようございます。たくさん掛けるところがあってわかりにくいわね。Gちゃんはこの松の形よ」と教える。カバンは始末できたが前に登園してきた二人の遊びをみているだけで、遊ぼうとしないので少しようすをみていると、汽車の方に注目しているようなので「こだま号を動かしてごらん」とG男を汽車のところへつれていく。レールを少しつないでやったら続けてG男もやり始めた。もういいだろうと入口にいくと、R子がげた箱がわからずベソをかいている。「Rちゃんひとりできたの、えらかったわね。あなたの場所はここよ。上靴にはきかえてごらんなさい」と上靴にはきかえさせた。

そこへD男とはっきりしたO子とC子が登園してきました。D男は外で遊ぶといって園庭へ出ていきました。O子・C子はさそいかけなくても、ままごとコーナーにきて、とだなを開けて道具をだしたり、カーテンをあけたり、とじたりしています。そこでR子も入れてみたくなり「Oちゃん、Cちゃん。Rちゃんも入れてやってね」というと「入れたるわ」といっている。R子はさそわれたので簡単にグループに入り、おちゃわんをだして遊びだしました。

・物を媒介してのけんか

一安心で保育室をみわたしますと、M男の姿がみられません。そこで外にでてみると、D男が動かしていた二輪車をM男がとろうと横からひっぱっている。そこでこのままにして幼児たちに解決させようかと思いましたが、D男が少しベソをかいているようですので思いきって二人に話しかけてみることにしました。「Mちゃん、Dちゃんがあの大きな木をぐるっと一回まわってここへきたら、Mちゃんの番にしたら。Mちゃんがまたぐるっと一回まわったらDちゃんね。交替でやってごらんなさい」というとM男は少し抵抗の感情を示しましたが二輪車から手をはなしました。D男は二輪車をひっぱって走りだし、M男はながめていました。もどってきたら教師の提案したとおりかわっていました。入園当初は、物を中心とした要求のぶつかりが多いのですがこのような解決のさせ方がよいのか少し不安が残りました。

・問題行動の多い女児たち

きのうも泣いていたT子が今日も泣いています。げた箱をみると上靴がありません。だれがよりによってこのなじめない子の靴を間違えていったのかしら、と思いながら、「あら、上靴がなくていやだったのね。だれかが間違えたのよ、先生みてきますからね」といって部屋の中の幼児をさがすと、Q子が口まで鼻をドロンとだしてT子の靴をはいていた。幾分カッとなっていた気持ちも、Q子の顔をみていると、何となくやるせなくなって、「Qちゃん、お鼻がでたらちゃんとかみましょうね」といってしまった。そしてかみ終わるのをまって、「Qちゃん、それTちゃんの上靴よ間違えたのね。Qちゃんの場所はこのあさがおのお花よ」とおしえる。さっきからこのQ子には困っていた。

「積木やったら」とすすめている子のところへきては「わたしそれする」「そうじゃ一緒におやんなさいね」というと、しばらくは遊んでいるが別の幼児がお人形で遊んでいると「わたしこれする」「じゃQちゃんはこちらのお人形であそんだら」というと「わたしもこれ」と手にとるが何もあそばない。そしてかたっぱしから「わたしそれする」と他の幼児がもっているものが気になるらしく、走ってきては、よこどりしていく。何故このような態度をとるのかと、ためいきと共に考えこんでしまう。いやいやQ子は行動力があるのだと善意に解釈し、気をとりなおすことにした。T子の手をつなぎ、カバンの始末を手伝ったがやはり涙ぐみきのうの柱にたっています。

まだ一〇名位傍観者はいましたが、ある幼児は椅子にすわって絵本をみ、ある幼児はブランコにのり、ある幼児はレールをひいて汽車を走らせたりして、遊びが少し軌道にのり始めたとき、入口からけたたましい泣き声が聞こえた。S子がお母さんにしがみついて大声をだしています。それをみて折角遊びかけたまわりの幼児も不安そうな表情になりました。やはりまだ不安な気持ちのところへ大声で泣かれると、自分も泣きたいような気持ちになるのでしょうか。「Sちゃんおはようございます。今日はお母さんにいてもらいましょうね」と話すと、すぐ泣きやみました。お母さんがうしろの椅子にすわるとS子もそばにすわり、友だちの遊びをみています。時間がたつにつれてお母さんのそばから友だちのあそびにつられブロックキャップをつんでいる女の子の方へ近よっていきますが、ハッと気がつくと、またお母さんのそばに行ってしまいます。それをくり返していました。

△五日目▽

五日目になると、もうほとんどの幼児は身のまわりの始末もでき、友だちと交替して遊具を使うなどの簡単な集団のきまりは理解したようです。そして遊びも活動的になり、自分でしたい遊びをきめて、それで遊べるようになりました。

・S子を親から離す

S子はほとんどお母さんのそばにいないで、友だちの遊びをたのしそうにみていましたが、お母さんがいればあまえて、さそいかけても少しも遊ぼうとしません。ほとんどの幼児が遊べるようになったのに、この幼児ばかりお母さんについてきてもらわなければならない、もう慣れて遊びかけなければ。……大丈夫かしら。というわたくし自身のあせりがあったのでしょう。お母さんに話して今日はお母さんと離してみることにしました。お母さんが帰ろうとすると、また大声をあげ、お母さんにしがみつきました。お母さんは「今日はお母さんがいなくてもちゃんと幼稚園で遊ぶといったやないの、いうことときかんとお父ちゃんに家にいれてもらえへんに」と真赤な顔していっています。

わたしは涙もでず大声をだしているだけのS子をみて、もういいだろうと思い、S子の肩に手をまわし、「お母さん大丈夫ですからどうぞ」と目くばせしていいますと、お母さんはS子のそばで心配そうにぐずぐずしています。「大丈夫ですから」とわたしは積極的にお母さんから離しました。S子は「いやいや、いやや帰る」とものすごい大声で泣き、手でたたき、足でけりバタバタしていましたが、わたしに抱かれ、お母さんがもういないことがわかると、ケロッと泣きやみました。

そばでみていた幼児たちもやっと落ちついて遊びだしました。わたしはS子とT子の手をひいて金魚に餌をやったりしましたが、自分からすすんで遊びのできない幼児のために、またお互いに名前をおぼえるように（これは手でつかまえ「あら○○ちゃんつかまったわね、今度は○○ちゃんの鬼よ」などといってやる）外にでて「坊さん坊さん」の遊びをしましたが二人は笑ったり楽しそうな顔をしていたのですっかり安心しました。

・Q子の大活躍

部屋にもどるとB子が「あの子あかへんに」「どうしたの？」と聞けば数人えのぐで包装紙にぬたくりをやり始めたところへQ子がきて紙にかかず、筆でめちゃくちゃ色をまぜたのだそうです。ほとんどどす黒い色になっています。長い時間かけて幼児の好きそうな混色を八色作ったのにこれでは色を重ねるも何もあったものではありません。みんなは黒い色になって興味をそがれたようですが、Q子一人はこの色まぜ遊びは楽しかったことでしょう。それにしてもQ子の靴入れやカバン掛を手あたり次第に使用する行動は相変わらず続きます。でも間違って自分の場所が使われてもそれがいえずに泣く幼児もあり、日に何回も問題を起こされると情けなくなってきます。ついにたまりかねて「Qちゃん、Qちゃんのはあさがおのしるしでしょ。でも先生がもひとつ、ほ

らこの赤いマジックでチューリップ書くわね。すぐわかるからいいでしょ」と、げた箱から靴・カバン掛・ロッカー・お道具箱・くれよんにいたるまで同じ絵をかきました。でもそのあとでQ子に特別のしるしをつけたことは、Q子の自尊心をきずつけたのではないかと深く反省しました。

S子は帰りも明るい表情でお母さんのところへ帰っていきました。

・S子のその後

ところがその翌日またお母さんにべったりくっつき、前と同じ別れ方で、がっかりしました。お母さんといっしょでは何も遊ばないので、積極的に離して、遊びに参加し、これは成功だと喜んでいたら、このありさまです。このはでな別れかたが一週間つづき入園から十日もたって、やっと泣かずに登園するようになりました。そのあとの活動はびっくりするほど変わってきましたが、五日目にわたくしのとった態度は無理だったように思います。あせらないで、もっとじっくりとお母さんと通うS子の姿を観察し、善処すればよかったと、深く反省しました。

傍観者は十日ごろは四名になりT子もときどき少し笑うようになり、友だちがさそってくれればままごとなどではお客さんになっています。

＜一か月＞

・クラスの姿

一か月もたつと幼児はすっかり安定して遊ぶようになりました。T子は感情をあまり外へ表現しませんが園をやすみません。S子はおはようと元気に一人で登園してきます。Q子もしるしをつけてから自分と他人の持物の区別はできるようになりましたが相変わらず無鉄砲な行動力があり、何回注意しても鼻はたれています。でも近ごろはわたくしの顔をみると条件反射で「鼻かもや」とかみだします。

ほとんどの幼児はさそいかけなくても自分から進んで遊ぼうとするし、今日は何をどうして遊ぼうと目的をもって遊んでいるので自信ができ、ちょっと助言を与えれば、遊びはだんだん発展していきます。ひとりひとりを大切にして、幼児の行動をよく観察して、その場その場で幼児の感情をどう受けとめていくかなどいろいろ問題はありますが、幼児とともにのびていく努力の中で解決しなければならないと失敗ばかりする自分にいいきかせています。それとともに入園後三か月位はひとりひとりの幼児の過去のパーソナリティの欠陥の治療の方面が多く、のびのびとした遊びの中で、あせらず少しでも早く治療していかなくてはならないと思います。

（四日市市立内部幼稚園）